

平成30年度能代市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 平成31年2月13日（水）午前10時～11時10分
- 2 場 所 能代市役所新庁舎 会議室9. 10
- 3 出席者 能代市長 齊 藤 滋 宣
能代市教育委員会
教育長 高 橋 誠 也
委 員 木 村 高 寛
委 員 西 村 省 一
委 員 中 嶋 佐千子
委 員 寺 田 恵美子
社会教育指導員 佐 藤 清 美
子育て支援課長 堀 内 孝 人
- 4 案 件 幼保小の連携について

【開 会】

【市長あいさつ】（市長）

今日は、幼稚園・保育園・さらには小学校、その連携の現状と取り組みについて、子供が健やかに成長できる環境を作るために、皆様から様々なご意見を願います。

【教育長あいさつ】（教育長）

先日、県北地区の教育長会議があり、北教育事務所長から不登校児童生徒の増加について話があった。全国的には1000人当たり13～14人、秋田県は10人ほど、能代市は7～8人ということで推移しているとのことであった。これは、病欠以外の年間30日以上欠席の児童生徒数の割合で、中一ギャップとか小一プロブレムと言われているが、昨年の総合教育会議でも市の教育大綱の案件の中で、家庭教育、幼保・小の連携についても話題になった。

今年度の総合教育会議では、幼保・小の連携を案件とし、市の教育委員会と市の取り組みを紹介しながら方向性等について、ご意見をいただきたい。

【案 件】（教育長説明）

＜秋田県幼少連携理解推進事業における取り組み状況（29年度）＞

市では、幼稚園・子ども園・保育所と小学校5校での連携が行われた。

連携内容は保育・授業参観、情報交換等が5月～12月までの間に行われ、その間幼稚園・保育園の年長児と小学校1年生との交流会、新入学児童の体験入学、そして情報交換が行われ

た。

課題としては、参観だけではなく、もっと詳しい“子供の育ち”について話し合う機会があればよかった。年長児と1年生の担任が具体的な連携の計画をたてる機会を持てればよかったなどがあった。

この県事業は29年度で終了、参加した施設・小学校は計画的に連携事業を推進しているが、その他、連携が進んでいないところもあり、今後の取り組みについて、お互いに共通理解していかなければと反省が残った。

＜能代市幼保小連携推進協議会の開催～2019年度からの連携強化にむけて＞

30年度に能代市幼保小連携推進協議会を初めて行った。参加者は全施設、幼保17の施設から23名の主任クラスの先生、小学校からは小1の担任だけではなく、教頭にも参加してもらった。

北教育事務所の浅野指導主事から「接続を支える幼保小連携」の講話があり、東能代幼稚園と二ツ井小学校から今の段階での交流の様子を紹介してもらった。

その後、学校区ごとに、グループ協議が行われ、お互い思っていたことを話し合った。

＜幼保小連携強化（円滑な接続）のための取り組みについて（2019年度～）＞

1つ目は、年度の早い時期から取り組みを進めるため、5月に推進協議会を開催し、現場の具体的な担任同士の研修会開催についても予定している。

2つ目は、今年度から行っているが、就学支援シートにより、子どもの様子や小学校で配慮してもらいたいことなどを小学校に引き継ぐ効果的なものとなっている。これも活用していきたい。

また、幼児通級指導教室は大変機能しており、新年度は受け入れの子どもたちを増やす計画で、予算措置もお願いしている。今後、子育て支援課との連携も必要と感じた。

3つ目は特別な支援を必要とする子どもの情報提供については、これまで以上に検査も含め、しっかり伝達・連携していく必要がある。

（市長）

ご意見・ご質問等について、委員のみなさんに順番でお願いします。

（木村委員）

今回、幼保が入ったのは、教育委員会にとって大変画期的なことと思う。

また、学力向上について、保護者から、子どもたちがスムーズに学習するため、どこまで準備していけばいいのか、その連携が見えてこない。話にあったアプローチカリキュラム（幼保）やスタートカリキュラム（小）が、子ども、幼保の先生、小学校の先生だけではなく、保護者にも理解してもらい、連携していくことが必要である。

アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムは、子どもたちの人間形成に大きな役割を担うと思われるが、多くの人と連携を図って、市民で子どもを見守っていく、育てていく、そういった環境をどうやって構築していくのが課題である。

（西村委員）

教育長の説明の中で、小1プロブレムの問題は、管内でもあるのか。

保育園は厚生労働省管轄、幼稚園は文科省管轄とそれぞれの教育の積み重ねてきた歴史があると思う。連携意識の取り組みで差があることで、今年度、全施設が参加することは非常に大事なことだと思う。ここら辺の温度差は管内ではあるのか。

あと、幼児に関しては子育て支援課、学校に関しては教育委員会と組織は分かれているが、協力してやっていただきたい。

それと、幼児期の教育は、家庭の時間が大きなウェイトを占めるので、保護者にも参加してほしい。

(中嶋委員)

幼稚園や保育園の先生は小学校の先生と比べると毎日の送迎を通して保護者とコミュニケーションをとる機会が多いので意思疎通がしやすい。

また、保護者の参加は、私も同感。ごはんを食べる、遅刻をしないなど基本的な生活リズムが浸透していけば、色々なことがスムーズになるのではないかな。

(寺田委員)

今の子育て支援のあり方について、両親が就労のため子どもを幼稚園や保育園に預けなければいけない方々だけを支援するのではなく、本来であれば、子どもとの時間を過ごしたい、産休や育休を取りたいお母さんたちが、子どもとの時間を取れる子育て支援を考えていただきたい。

(市長)

各委員からのご意見等について、教育長にお願いします。

(教育長)

小1プロブレムについて、能代市以外であるが、入学するに当たって、うまくスタートできなかったという事例があった。当時、幼保担当の指導主事と、こういうところが大事だと話をし、がんばらないといけないと思った。小1については周りの配慮が必要だと感じ、この後の連携は、きちんとしていかなければと考えているところである。

温度差については、幼児期の終わりまでに育ってほしい児童の姿という幼稚園の要領に謳われており、小学校側も学んで、幼稚園・保育園との温度差がないようにしたい。

それと家庭教育とか、保護者を参加させることについて、家庭生活の様子を幼保の先生が見て、ここの家は保護者も含めて、いろんなことをやっていかなければいけないというように、家庭教育と幼保・学校との連携もあるのではないかなと思った。

最後に、生活の中で色々なことを幼保の子どもたちが気付いて育っていく、学びの芽生えとか、人との関わりとか、そういうことを幼保で大事にし、学校に繋げていくことが必要と考えている。

(市長)

関連して、佐藤社会教育指導員にお願いします。

(佐藤社会教育指導員)

入学説明会で、保護者に話しをする機会があるが、子どもが学校で勉強する最初の条件として、話をしっかり聴くことが大切だと話している。その際、子どもの聴く力を育てるのは家庭であり、子どもの話を親がきちんと聴いてあげることが子どもの聴く力を育てることになる。舐（しつけ）と同じで、子どもにしてほしくないことは、親としても見せてはいけない。そうやってほしいと思うのであれば、親がそのようにして見せる、というのが一番です。悩みがあったとき、分からないことがあったとき、いつでも聞けるところ、手軽に行けるところを知ってもらうことが大事と思う。

(市長)

子育て支援の部分について、堀内課長にお願いします。

(堀内課長)

親が、子どもと一緒に時間を過ごすことは、当然一番いいことであるが、産休・育児休暇については、企業の就業関係になるので、子育て支援課の問題だけではなく、庁内の関係部署とも協議等を行い産休・育児休暇が取りやすい社会の仕組みを構築していくべきだと考える。

(市長)

産休や育休を取得しているお父さんお母さんが、子どもと接触する場面をどうにか増やして、そういう時間を楽しく過ごせるような支援もあるのではないかとの話であったと思う。そのあたりについて堀内課長、再度お願いします。

(堀内課長)

子育て支援センターには、親と子どもが触れ合えるスペースがあり、保護者間の情報交換や育児支援の場として利用いただいている。

また、子育てに関する相談先として子育て支援センターはもちろん、子育て包括支援センターを設置して、母子保健という目線で保健師などを常駐させて、様々な相談等に対応できる体制づくりを進めており、保育所や幼稚園なども含め、相談先にかかわらず、しっかりとつながる支援をしてまいりたい。

(市長)

豊島区と教育連携して一番感じたのが、われわれの子どもたちも学力テストについて成績はいいのですが、豊島区は学ぶということに対する姿勢がすごく積極的である。

また、最近の世相をみていると子どもの教育よりも親の教育が必要との思いがある。子どもの人間形成において、家庭教育の部分は、すごく大きく、幼保小の連携に家庭も加える必要がある。

親の幼児教育や子育てに対する意識の濃さ、そこをどう高めていくかが大事だと思う。

(木村委員)

能代市民がみんなで子育てしていくというところに家庭が入ってきたことは非常に大きなことである。

また、連携意識の違いにより取り組みの内容に差がある、それがどこの保育園・小学校に上がっても同じ意識で子どもたちが、その環境の中にいることができる、そういった意識の違いや取り組みの格差をなくしていくというか、そういう組織であればいいと思う。

あと時間があれば虐待についてもお願いしたい。

(市長)

虐待について、教育長にお願いします。

(教育長)

家庭に対するアンテナを高くして、子どもたちの情報を拾えるような体制をとらないといけないと思っている。

(中嶋委員)

子育て支援センターは、夫婦で、悩みごとなど個別に相談できる仕組みもあるのか。

(堀内課長)

子育てに関する相談は、センターで子どもと一緒に遊んでいる間や電話でも受け付けている。

(中嶋委員)

カウンセラーは保健師か。

(堀内課長)

子育て支援センターについては、保育士が対応している。また、子育て包括支援センターは、母子保健の目線で保健師が相談を受けており、保育士もいるので、様々な相談に対応でき、どちらに行っても相談をつなげられる。

(中嶋委員)

核家族で、悩みごとについて、子育て支援センター等を活用できれば、子育て世代にはありがたい。

(市長)

親の教育について、ご意見があったら願います。

(木村委員)

佐藤社会教育指導員が、いつも出している新聞「オンリーワン」あの内容が保護者の目に止まってくれたらと思っている。

その中に、“乳児は肌を離すな、幼児は手を離すな、少年は目を離すな、青年は心を離すな”で、発達の段階によって親の対応を簡単な言葉でお話ししていた。

(西村委員)

寺田委員、幼稚園、保育園の授業参観で保護者の集まり具合はどうか。

(寺田委員)

幼稚園の保育参観は、ほぼ全員参加。

(西村委員)

小学校や中学校だと、その保護者があまり来なくなる。

(教育長)

PTA連合会とかの講演会などでも、そういう来てほしい人が来てくれない。それでも悩んでいる親はいると思う。影響力がある人を集めて何かやることも面白いと思う。

(市長)

ある月刊誌を私が読んで、大変、倫理や道徳観に共感するところがあって、こういう本があるから、みんなで回し読みしてみたらと言ったのが、私が市長をやってから10年ぐらいたってからである。やっぱり、押し付けにもなるし、本があるよと誰かに言っても、今、忙しくて難しいと、その段階もステップアップして踏み台がいる。

（佐藤社会教育指導員）

幼保の授業参観とか父母の会には結構集まるが、小学校になるとPTAの研修会を企画しても集まらない。原因は、はっきりしていないが、そういうことがある。

（市長）

その幼保の段階で、保護者に意識を持ってもらうことを少し企画したらいいかもしれない。他にないようなので、本日の案件は、終了する。

【閉 会】